

The Psychiatrist in Japan

— 第14回 —

日本うつ病学会総会

第14回日本うつ病学会総会 会長
慶應義塾大学医学部精神神経科学教室 教授

三村 將

サイエンスとアートの
新たな融合

2017年7月21日(金)-23日(日)
京王プラザホテル/NSスカイカンファレンス

日本うつ病学会は、うつ病や双極性障害の臨床と基礎研究の発展・充実、およびより質の高い医療の提供を目指して、2004年に設立されました。現在、会員数は1,500名を上回り、医師や医学研究者のみならず、看護師、臨床心理士など幅広い分野の職種で構成されています。

きたる2017年7月21日～23日に東京・新宿にて第14回日本うつ病学会総会が開催されます。同総会会長を務められる三村將先生に、大会の狙い・プログラムの見どころについてお話を伺いました。

テーマは 「サイエンスとアートの新たな融合」

2017年7月21日(金)～23日(日)に東京・新宿にある京王プラザホテル/NSスカイカンファレンスにて開催される第14回日本うつ病学会総会の会長を務めさせていただくこととなりました。

今回の総会は、2015年の総会と同様に、日本認知療法・認知行動療法学会との合同開催となります。合同開催だからこそできるそれぞれの学会の特色を融合した企画や構成をシンポジウムや教育講演などのプログラムに反映させることで、単なる2つの大会の足し算ではない、より充実した内容の総会を目指したいと考えています。

今回の総会テーマは、「サイエンスとアートの新たな融合」といたしました。気分障害の診療においては、病態・病理学的研究や薬理学的研究といった診断・治療の妥当性や有効性を裏づける“サイエンス”と、認知行動療法などのさまざまな精神療法の実践で求められる“アート(技能)”の2つを両立させることが診療の質を高めるうえで不可欠といえます。今日の医学教育の基礎を築いたWilliam Osler博士の「臨床医学はサイエンスに基礎を置くアートである」という言葉にもあるとおり、両者の融合の重要性はかねてから指摘されてきました。そして、両者の融合に“新たな”という言葉が付加した意図は、近年の研究においては精神療法の有効性に

対する生物学的基盤の検討が行われるなど“アート”のscientificな側面が模索され、新たな潮流となっています。その一方で、薬物療法における薬理学的作用としてのプラセボ効果への再評価や、治療においてみられるレジリエンスの個体差への着目といった“サイエンス”に対するアートの視点の導入も重要です。このように、“サイエンス”と“アート”の双方向性がより志向されつつある現状を踏まえています。

今回の総会では、特別講演としてロンドンキングスカレッジ精神医学研究所のAllan Young教授に難治性うつ病について特別講演をいただきます。また、曹洞宗国際センター所長の藤田一照師にマインドフルネスに